世界最強の剣士の弟子

火神零次

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

《比翼》のエーデルワイス。

世界最強の剣士でありながら、犯罪者という側面を持つ彼女の唯一の弟子である少年が、ヤンデレ気味な幼馴染みに頭を悩ませながら、《落第騎士》黒鉄一輝たちと共に日々を戦い抜く。

目次

プロローグ 1
一年生編 4
一年生編2 8
一年生編3 17
一年生編4 24
一年生編5 31
一年生編6 35

プロローグ

「――はぁ、はぁ、はぁ、っ……！」

襲い掛かる雷を刀を使って振り払う。この時点で人間業ではないことをやってのけている。しかし、襲い掛かる雷は一切、止むことはない。あらゆる角度、速度を以て少年を貫かんとしている。

「フッ――ハァァァァ!!」

一斉に襲い掛かる雷を切り払うと、少年は膝をついた。彼にはもはや立てる体力など残っておらず、突き立てた刀を杖代わりにして、その体勢を維持するので精一杯だった。

「ハッハッハ、やはりお前さんはこれを切り抜けられたか。爛よ」

腰に刀を携え、暗い青を基調とした着物を着こなしている老人が現れた。

少年の名前は宮坂爛。総合武術・宮坂流を伝授している宮坂家の長男であり、既に師範代の資格を持っている。

「流石に、《雷神龍（ライトニング・ドラゴン）》は無茶がありますよ……雅さん」

肩で息をしながら、なんとか立ち上がる。

老人の名前は葛城雅。《雷神》という異名で知られており、第二次世界大戦にて黒鉄龍

馬と南郷寅次郎と共に日本を戦勝国へと導いた男。
「伐刀者としての才能はあまりないが、戦闘に関しては天才的じゃな」
伐刀者。
千人に一人が持つと言われる特異体質。異能の力を操り、自身の魂を形にして戦う者であり、この力を持つ者は重い社会的責任がある。
力を持つ者は、正しくそれを振るわなければ一般人を虐殺し、場合によっては国ひとつ滅ぼすことが出来る。
それ故に国はそれを管理する必要があり、伐刀者によるテロを防ぐためにも伐刀者の育成をしなければならない。
二人もまた伐刀者であり、力をつけるための鍛練をしていたのだ。
「……いえ、俺はまだまだです。少なくとも、手が届く限りの人を守れるようにならないと」
「そのストイックさは、誠一郎譲りじゃの」
「否定はしませんよ」
爛には「ストイックだ」と言われても否定しない。元より、可笑しいくらいストイックなのは祖父も父も変わらない。親から子に受け継がれるものとはよく言ったものだ。
曾祖父の宮坂誠一郎は伐刀者ではない。それなのにも関わらず、誠一郎は第二次世界

大戦にて非伐刀者でありながら刀一本で複数の伐刀者を相手にし、傷一つすら負わずに勝利したことから《剣神》と恐れられた。
「この様子なら、誠一郎に次ぐ《剣神》になれるじゃろうな。あやつも嬉しいじゃろうて」
「父と祖父を差し置いて《剣神》とは……まあ、父さんは異能が強すぎるところもありますが」
父だけは怒らせてはならないと思っている。異能が強すぎることも相まって、怒らせたら母以外では諌めることはできないだろう。
「……六花を頼むぞ」
「分かっています」

一年生編

破軍学園の入学試験を無事に合格することが出来た爛は、自分より劣った存在と出会った。

自分が『魔術』に関しての知識はあれど、才能は平凡以下であることは自覚していたが、まさか自分よりも劣っている存在がいるとは思ってもいなかった。

「宮坂くんって、あの《天剣》の息子さん？」

「そうだ。それと『宮坂くん』は止めてくれ。呼び捨てでいい。これから一年は、ルームメイトなんだからな」

「そうだね。これからよろしく、爛」

「よろしくな、一輝」

自分よりも劣っている少年――黒鉄一輝が差し出した手を握り、握手を交わす。

《天剣》は、ＫＯＫ・Ａ級リーグ元序列一位であり、爛の父『宮坂双木』の二つ名だ。

頂点に立つことが出来たのは、双木の能力が比類なき強さを持っていたから。それは双木本人も認めており、剣だけではそこに立つことは出来ないとも言っていた。

「まぁ、俺の曾祖父も凄い人だったけどな」

「爛の曾祖父……？　もしかして《剣神》!?」
「あぁ。武術を多少は齧る程度で出てくる名前だからな。それだけ、俺の曾祖父は武術に大きな影響を与えているわけだ」
多少、武術を嗜む程度で出てくるほどの大物。
第二次世界大戦にて、まさに一騎当千とも言える活躍をしていた誠一郎は、武術の面にも大きく影響している。三人しかいないと言われる総合武術・宮坂流の究極の型を会得した者。
異常なほど剣への執着は、まさに『鬼』と言わしめるほどでもあり、海外では《剣鬼》とも呼ばれているそうだ。
「……にしても気になるが、一輝は黒鉄家の人間なんだよな」
「そうだよ。それが何か？」
「すまない。嫌われることを承知で言うが、名門とも言われている黒鉄家で、一輝のような人間を魔導騎士の道に進ませるとは思えなくてな」
黒鉄家の当主は黒鉄厳。秩序を重視し、私情を一切挟まないことから、《鉄血》の二つ名で呼ばれている。
エリートを数多く輩出している黒鉄家からすれば、一輝という存在は『異端』そのもの。それを、彼は許しているのだろうか。

「……僕は、親からこう言われてたんだ。
　何も出来ないお前は、何もするな……って」
「……とんだ親だな。周りの人間は何も言わなかったのか」
「妹の珠雫は違ったかな。でも、父さんは珠雫の言葉すら耳に入れようとはしなかった」
「すまない……聞いて悪かったな」
「ううん。こうして聞いてくれるだけでも、助かるよ」
　今の日本の魔導騎士社会はランク重視だ。
　高いランクを有する者は尊敬の目を向けられ、低いランクの者は見下される。これから、その道を歩もうとしている一輝は、自分以上に逆風が吹き荒れることになるだろう。余りにも過酷な茨道だ。
「あ、そうだ。爛もよかったら朝練しない？」
「勿論だ。俺も欠かさずしているからな」
　体が資本である自分達が鍛えることを怠ってしまえば、元々落ちこぼれである自分達は、高いランクを保有する者達に負けてしまう。少なくとも、基礎的な部分で勝っていなければ、彼等と同じ土俵に立つことすら出来ない。それは一輝が一番よく理解しているはずだ。
「それじゃ、買い出しにでも行くか。何か食いたいのはあるか？」

「爛は料理出来るのかい？」
「ああ。家では飯を俺と母さんで分担しているからな。人並みには出来るさ」
「だったら、カレーをお願いしようかな」
「分かった」
　買い出しにでも出掛けようと、準備をしている最中に、一輝はこんなことを尋ねてきた。
「爛って、男子って感じしないよね」
「……そうか？　まあ、容姿はそうかもしれないな」
　制服が男女で違うお陰で、性別の判断はつけられているが、もし爛が女装をして、女子の振る舞いをされたら女性だと勘違いしても可笑しくないほどに、中性的な見た目と声をしている。
「よく周りから言われたよ。男らしくないとな」
　小さい頃は女の子とよく間違われたこともあった。両親や姉は面白がって女装させようとしてきたこともあったし、それを幼馴染みに見られたことは恥ずかしい思い出だ。
「お陰で姉や幼馴染みに弄られたことは、結構参ったがな。あまり気にしてはいないよ」
　気にしても、この姿が変わるわけではないと言った爛は、買い出しに出掛けた。

一年生編２

朝からトレーニングをすることにした二人は、朝早くから走っていた。
「これは中々……辛いね」
「魔力制御の向上も兼ねているからな。これを毎日続ければ、少ない魔力でも正確に扱えるようになる」
これのお陰で、魔力制御のランクはとても高い評価を得ている。魔力量の少ない一輝でも、正確で精密な魔力制御を身に付けることで、戦闘の幅は多少広がるはずだ。
一輝が普段から行っている２５㎞ランニングに、特定の場所から魔力を放出することで、的確な魔力放出と制御を可能にする方法を実践する。
魔力を消費することでも体力が奪われることがある。特に魔力量が少ない自分達では影響が少ない方だが、無視できないわけではない。これを実践することで魔力を消費しても戦える状態を維持できるようにすることも、このトレーニングの目的にある。
「爛は、これをいつから？」
「少なくとも六歳の頃からは」
「凄いね……そんな頃からそういうことをしていたのか。確かに、この程度じゃ息が上

がらないわけだ」
　肩で息をしている一輝の隣で、軽く汗をかいている程度でいる爛を見て、常にやり続けることの意味を痛感する。
「続けることに価値がある。それは一番、お前が分かっていることだと思うぞ?」
「否定はしないよ。僕だってよく分かっているつもりだ。でも、これで幅が広がるとは思わなかったな」
「使えるものは何でも使う……例え、小さなコップ一杯にしか入らない量であったとしても、有効に使う方法はいくらでもある。生かすか殺すかはお前次第だ」
　微弱な魔力であったとしても、使う方法はいくらでもある。どのように扱うかはその人間次第だが、あらゆる事に手を出して、己を高めようとしている人間は強くなる。それを体現している人間を、爛は知っている。
「よし、落ち着いたところで始めるか」
　一輝が落ち着いたのを確認すると、爛は構えた。その手には何も持たず、格闘術の構えをとっていた。
「あらゆる技術を必要とするなら、格闘術は必須だ」
「勿論、多少は心得ているつもりだよ」
「パンクラチオン……というわけにはいかないが、手合わせは必要だろう。互いにどれ

だけの実力があるか分からないからな」
「なるほど、手合わせをすることでお互いの実力を測るわけだね。合理的かつ簡単な方法だ」
　互いに手合わせをすることに異論がない以上、しないという選択肢はない。構えた二人を静寂が包む。
「行くぞ！」
　沈み込み、足のバネを利用して少し離れた距離を一気に詰めて回し蹴りを繰り出す。
「ぐっ！」
　合図に近いものがあったとはいえ、詰めるスピードが速い。構えていたからこそ防げたが、不意打ちだったら頭を持っていかれていた。
「ハア！」
　フリーになった爛の体を狙い、拳を繰り出す。
　振るった足を戻し、体勢を低くし体を反らす。
「フッ！」
　顔に向けて飛んでくるパンチ。
　顔を傾けることで避け、反撃を繰り出す。
　しかしながら、お互いの打撃はどちらも当たることはなく、ひたすらに空を突き抜け

るだけだった。
「……これじゃ、キリがないね」
「同感だ」
互いにどれだけの実力を有しているかは、おおよそ把握できた。
だが『足りない』。それだけは断言できる。まだ一輝は上を目指すことができるはずだ。黒鉄家では誰かに教えてもらうということはされなかっただろう。
独学だからこその癖。甘いところがまだある。それでも、独学で到達できる領域には最初から居なかった。
「今日から授業もあるから、この辺で終わりにしよう」
「ああ、そうだな」
初日から遅刻という事態は勘弁して欲しいところだ。生活に慣れるまでは早め早めの行動をしていくことにしよう。
……と、多少の意気込みをしていたものの、突如として出された規定により、出鼻を挫かれたような気分になった。
『Eランク以上の魔力量を保有する者のみ、実戦授業の受講を認める』
ありもしない規定だということはすぐに察することが出来た。
既に一輝が黒鉄家でどんな扱いを受けてきたか知っている爛は、この規定に該当する

人間が一輝しかいないことを知った上で行っていることも分かった。
元より、入学試験が存在している破軍学園で魔力量がＦランクである一輝を迎え入れることなんかするわけがない。だが、彼が迎え入れられた理由は彼がいる試験部屋にいた魔導騎士が、破軍学園に入学するに値する者だと判断したからだ。
「一輝、黒鉄家はこんなことを普通に仕出かすのか？」
「……しても可笑しくないね」
否定して欲しかった言葉に返ってきたのは、肯定の言葉。その事実に、爛は舌打ちをした。
茨の道に進もうとする子供を止める気持ちは分からないわけではないが、権力を振るってまで止めさせようとする理由は分からない。
だが、《鉄血》はそれが出来てしまう。奴に親としての情があるとは思えない。そういう結論に、爛は至ってしまった。
そうして、重苦しい空気を二人が纏っている中――
「ら～～～ん！」
爛を呼ぶ少女の声が聞こえた。
声がした方向に、二人して向いた瞬間。
「どわっ!!」

突っ込んできた少女に押されるがまま、爛は倒れた。その際に鳴った鈍い音は、一輝の額に冷や汗を浮かばせた。
「爛!?　大丈夫!?」
「だ、大丈夫だ」
思いっきり地面に打ち付けた後頭部を手で抑えながら、爛は突撃して押し倒してきた少女に声をかける。
「爛、久しぶり!」
「ああ、久しぶりだな。
……起こしてくれないか?」
「あ、ごめんね?　今、起こしてあげるから」
爛の手を引っ張って起こす、六花と呼ばれた少女。
「紹介するよ。葛城六花。《雷神》葛城雅さんの血縁者に当たる。二つ名を《雷霆》」
「あの《雷神》の……!?」
「……大切なこと忘れてる」
「何か忘れてるか?」
紹介するには十分すぎると思うのだが。
何が足りないのか全くもって見当がつかない爛は、首を傾げる。その反応に不満そう

な六花は頬を膨らませた後、爛に抱きついた。
「爛の幼馴染みってこと！」
　満面の笑みで爛と幼馴染みだということを告げる六花は、そのまま頬擦りをした。
「君が爛のルームメイト？」
「うん。僕は黒鉄一輝。よろしくね、葛城さん」
「あ～、僕の事は六花でいいよ。堅苦しいのは苦手だし、これからよろしくね、一輝！」
　幼馴染みにしては仲が良すぎる。恋人だと言われても可笑しくはないと思った一輝は不意に微笑み、ちょっとした欲求を満たしたくなった。
「幼い頃から仲が良かったのかい？」
「うん。家も近かったし、家族絡みで会うことが多かったもんね」
「元々、清一郎さんと雅さんは友人だったんだ。曾祖父の代から六花の家とは仲が良かったってことだな」
「そうなんだ……ところで気になるんだけど」
　二人が幼馴染みだということは分かった。「久しぶり」という言葉も、二人の関係を考えてみれば、そういう言葉が出てくることも容易に想像できる――のだが、どうしても気になることが一輝にはあった。
「なんでそんなにくっついてるの？」

二人の事を指差しながら言った。
六花は首を傾げているが、爛は一輝の言いたいことが伝わったのか、苦笑を浮かべながら答えた。
「六花とはいつもこんな感じなんだ。俺は困ってないから平気なんだが……」
爛の左腕に抱きつく六花は、これが普通ですと豪語するかのように平然としている。
「好きな人にくっついたらいけないの？」
「あ、いやそういうわけじゃないんだけどね……」
「一輝、何か言うのは諦めた方がいい。俺はもう諦めた」
長い付き合いがある爛でさえとやかく言うのを諦めたとなれば、自分ではどうすることも出来ない。
「六花、颯真はどうしたんだ？」
「颯真？」
「幼馴染みだ。同じ歳だから、魔導騎士学校に入学しても可笑しくはないからな」
「颯真なら、同じ破軍学園だよ。僕も何処にいるかは……」
もう一人の幼馴染みを探そうとしたところで、授業が始まる予鈴が鳴る。
「ったく、間が悪いな。仕方ない……颯真を探すのは授業が終わってからにするか」
「次の授業は、確か実戦授業だったよね」

「ああ……一輝」

戦いにおける判断を間違えないようにするためには、実戦の積み重ねが大切だ。魔導騎士になると言うのであれば、これが重要になるのは言うまでもないだろう。その練度を上げるためにも、実戦授業が用意されており、学生騎士が魔導騎士学校を卒業するのに必要な単位数が一番多い。

爛が一輝を心配するような目を向けるのは、突如として出された『ありもしない』規定が原因だ。魔力量が足りない一輝は、実戦授業を受けることが出来ない。単位は絶対に足りなくなるし、この規定を無くさなければ、どれだけ学園に居ようとも永遠と留年を繰り返すだけだ。

「分かってるよ。爛」

だというのに、一輝の顔は少しも淀んでなどいなかった。

瞳の奥では『転んでもただではすまない』と静かに闘志が燃えているのを感じる。

一輝は来た道を引き返す。

「……行くぞ、六花」

「……うん」

なら心配はいらないと。

そう確信した爛は一輝とは逆の方向に向かって歩いた。

一年生編3

実戦授業は基本的に学園の敷地にある訓練場で行われる。学生騎士たちが滞在している寮兼校舎とは別の場所にあるため、ちゃんと場所を覚えていないと授業に間に合わなくなる。

「そういえば、颯真も同じクラスだったな」

「っていうか、一時間目に気づかなかったの？」

「興味はなかったからな。一輝と話してるだけだったよ」

他の生徒を気にかける余裕がなかったというのが本当のだが。

「それにしても、二人ともランクが高かったな。六花がAランクで、颯真がBランクだったな」

騎士としての能力はそれぞれ測られ、全体的なランクが騎士ランクとして登録される。

騎士として測定されるものは、攻撃力、防御力、魔力量、魔力制御、身体能力、運と六項目。

それらをA、B、C、D、E、F……と六段階で評価され、六花や颯真のようにAラ

ンクやBランクに相当する騎士は突出した才能を持つ『天才』の部類。逆に爛や一輝のようなEランク、Fランク騎士は、魔導騎士としての才能がないと評価される『落ちこぼれ』と揶揄される存在だ。

魔導騎士としての才能は完全な先天的体質だと言われており、特に魔力量の値は絶対的に変わらないとされている。

「僕としては、爛のランクが低いっていうことに納得いかないんだけど」

「仕方ないだろう。測られた能力値は魔導騎士として求められる『純粋な力』を測定したものだ。どれだけ実戦が強かろうと、このランクを覆すというのは無理な話だ」

また不満そうな顔をしている六花の頭を撫でる。彼女がそのようなことを言うのは、幼い頃から剣を振るい、《剣神》と謳われた男の剣を継ぐように、天才的な才能を開花させ、剣だけであれば道場の上級者たちを軽く捻り倒し、負け無しの爛を見てきたからだろう。

だが、爛が天才的なのは戦闘の才覚だけ。魔導騎士としての才能はない。天は二物を与えずとはよく言ったものだ。

もし、彼に魔導騎士としての才能もあったのであれば……きっと彼は《風の剣帝》すらも凌駕する魔導騎士になれたのだろう。

なんてことをやっている内に授業が始まる鈴が鳴った。

「今日で初めての実戦授業になる。細かいことは生徒手帳にメールで送られているから、気になる奴は確認しておけ。今回は同ランクの者同士で模擬戦を行ってもらう」
「先生、葛城さんと音無さんはどうするんですか」
「二人でペアになってもらう。同ランクの者がいない以上、近い者とやってもらうことになる。ペアを作って模擬戦を始める」
それぞれ生徒たちが集まってペアを作り出す。
固定ペアとなった六花と音無颯真……特に、六花はその風景を面白くなさそうに見ていた。
「つまんないの」
「そう言うなよ。爛のランクが低いってことには俺も驚いたけど、戦闘なら負け無しだろ。あいつは」
「そうだけどさあ……」
実戦授業では、全ての生徒たちを評価するために制限時間を設け、場外に出た際のタイムカウントを取らないようにしている。
作り終わった生徒たちから模擬戦を開始している中、二人は最後で模擬戦をすることになっていた。
勿論、二人は爛の模擬戦を見た。だが、その結果に不満の溜め息を溢した。

「今の、わざとだったよね」
「ああ。ありゃ絶対わざとだな」
　どう見ても爛が勝てるというシナリオがあったにも関わらず、爛は負けた。早々に模擬戦を終わらせるように、相手の攻撃をわざと大きく避けて、場外負けになっている。
「相手にならないから……かな」
「どうだろうな。少なくとも、俺には『戦いに慣れていない』という感じに見えるからな。演じているかもしれない」
　落ちこぼれは落ちこぼれらしく。
　爛はギリギリＥランクを取れているだけに過ぎない。Ｅランクでいられるのは、魔力制御と身体能力に救われているだけでしかない。
　同ランクの者同士での模擬戦だとはいえ、ギリギリＥランクを取れているだけの人間が勝ってしまえば、周りから飛んでくる言葉に対する感想は、『理不尽』の一言にしかならないだろう。
　ランク主義の社会では、爛は異端だ。
　実力主義であれば、爛は本来のように戦えるのだろうか。
「二人とも、あのＥランクの彼が気になるのかい？」
　二人のもとに、一人の学生がやってきた。

何者かなんてことは知っている。今年度の首席と次席に次ぐ、第三位での入学者、桐原静矢。

「……まあ、幼馴染みなんでね」

ぶっきらぼうに颯真は答えた。

「君たちも大変だね？　彼みたいな落ちこぼれと一緒に過ごしてたなんて。恥ずかしいと思ったんじゃない？」

桐原の言葉に、颯真は舌打ちをした。

桐原は憐れんだような声で二人を気遣っているのだろうが、沸き出てくるものは桐原に対する嫌悪だ。

「……」

颯真は何も答えない。六花は既に黙っており、口を開こうともしない。

「まあ、彼はここにはいないFランクの落ちこぼれと同じルームメイトらしいからね。同ランクの学生に負けるんだから、落ちこぼれ同士で無様だよ――」

「黙れ」

これ以上、喋らせてはいけない。

既に六花が限界を迎えようとしている。

桐原の胸ぐらを掴んだ颯真は、今にも殺しそうな形相で威圧しながら言った。

「これ以上、あいつのことを喋るな。ランクだけでしか人を測れない人間が、あいつを語るな……!!」
「おやおや、随分と必死だねえ。そんなに彼のことが大事なのかい？」
何を言っても出てくる言葉は爛を蔑む言葉ばかり。
これ以上、一触即発でこちらから手を出したらそれこそダメだ。
「何を俺の話題で盛り上がってるんだか。いい度胸だな、桐原静矢。なんなら、模擬戦でもするか？」
間に入ってきたのは、苦笑を浮かべた爛だった。颯真の肩に手を置き、引き下がるように目で言った。
「あはははははは！　模擬戦？　馬鹿なのか、君は？」
「大真面目さ。自分の能力に過信するだけの人間が、努力した奴に負ける屈辱ってやつを教えてやるためにな」
「良いだろう。そこまで大口を叩いたんだ。精々、鼠のように逃げ回ってくれよ？
……先生、僕は宮坂君と模擬戦をしたいのですが、良いですか」
「……構わない。ちょうど残っているのは桐原たちだけだ。宮坂、また模擬戦になるが」
教師としての務め故か、爛を心配する言葉を言った。だが、爛にそんな心配は不要だ。
「問題ありません」

キッパリと言い切った爛は、リングへと向かった。

「ランクの差は絶対的だということを教えてやるよ、宮坂君」

一年生編４

リング上で相対した二人。

「行くぞ、刻雨」

「狩りの時間だ、朧月」

武装となった己の魂を握る。

爛は鞘に納められた黒塗りの日本刀を。

桐原は洋弓を。

この模擬戦、一般的に考えれば桐原の圧勝になる。魔導騎士同士の戦いにおいて、相手の能力を知ることは必要と言えるだろう。

学生騎士はそのステータスを測定されている。それによってつけられた騎士ランクは、その学生が有している魔導騎士としての能力である。

ある意味ではそれが全て、と受け取れるがランク重視の社会において、騎士ランクは絶対と認識している。

「君はどんな無様な姿を見せてくれるかな？」

「……」

「おー、怖い怖い。そんな目を向けてくるなんて。本気にさせちゃったかな？」

挑発を続ける桐原。

人の激情を買うのは随分と得意なようで、それだけ自分がこの模擬戦で負けることはないと自負している。

対して、爛は桐原の挑発の言葉に何も答えず、ただ立ち尽くしている。

「それじゃあ、始めようか」

リング上に木々が生え始め、やがて森を形成した。

身体能力を強化できれば、木の枝の上に登り、射ち下ろすことが出来る。森は弓兵の独壇場とも言えるだろう。

爛の正面に立っていたはずの桐原は見えなくなり、爛は視覚による情報で桐原を捉えることは出来なくなった。

「鼠のように這い回ってくれよ？　宮坂くん！」

突如として放たれた矢。

視覚の情報を遮断され、どこから飛んでくるか分からない矢を防ぐことは難しい技だ。頼りになるのは聴覚だが、遠距離から敵を狙う弓を相手に、聞き取れる音もあったもんじゃない。

つまり、爛は戦闘において頼るべき視覚と聴覚が使えない状況なのだ。これでは、桐

原が圧倒的に有利。
　とはいえ、飛んでくる矢は常識的に考えれば曲がったりすること無く重力の影響を受けながらも、真っ直ぐに飛んでくる。木の幹を利用しながら、飛んでくる矢を避け続ける。
「逃げ回るだけで精一杯かい？　はっ、お似合いだよ！」
　容赦なく、矢を放ち続ける桐原。
　逃げ続ける獣を殺すまで追い立て続けるのは、まさに狩人だと人々は言うだろう。見えない恐怖というのは、獣であれ人間であれ思考を狭める。単調な思考しか出来なければ、狩る側は楽なものだ。
「そらそらそらそらあ！」
　爛は必死で逃げているという印象を受けるだろう。どこから来るかも分からない攻撃に対して、どうにかしろという方が無理難題な話だ。
　桐原は追い詰められた獣をさらに追い立て、まさに狩りに興じていた。
「っ……！」
　矢を避け続け、どのように避けるのか分かったのか。逃げ道を潰され、跳躍して避けた先には真っ直ぐに飛んでくる一本の矢。それに、気づけなかった爛の右胸に矢が突き刺さった。

たまらず膝をつき、矢を引き抜く。幻想形態を使用しているため、血が流れ出すことはないが痛みはある。

「ほらほら！　友達にカッコいいところを見せたいんだろう？　頑張ってくれよ！」

すかさず三本の矢を放つ。

膝が地についたままの爛には、確実に矢は突き刺さる。確信していた勝ちが確実になったと桐原は口角を上げるが――

「……へっ？」

目の前に映ったあり得ない光景に、すっとんきょうな声を出した。

桐原の目論み通りなら、目の前にいる爛は三本の矢を避けることも防ぐことも出来ずリングに倒れているはずだった。

だがどうだ。

最初から分かっていたように、三本の矢は刀によって弾かれていた。

「……行くぞ」

立ち上がった爛は構えた。

しかし、爛が桐原を捉えることは出来ない。勝ちは揺るがないと確信している桐原は矢をつがえ、放つ。狙うは右の脛。当たればまともに動くことなど出来なくなる。

「なっ……!?」

そこに来ると分かっていたと言わんばかりに矢を踏み潰す。流れるようにして爛は自身の刀を投擲した。

声にならない悲鳴をあげようとした桐原を止めるように、見えないはずの桐原が立っている木の幹に的確に当てた。

矢をつがえよう。

早く逃げよう。

目の前にいるのは『理不尽』そのものだ。

桐原の思考は恐怖に埋め尽くされた。そこに生まれた隙が命取りで。

「がっ……!?」

瞬きする暇も与えられずに、一瞬で距離を詰めた爛よって斬り伏せられた。

桐原が意識を失ったことで維持ができなくなった森は、跡形もなく消えた。

「そこまで！　勝者、宮坂爛！」

この戦いを観戦していた生徒たちがどよめく。

目の前で見せられた、あり得ない光景に自分が嘘偽りではないと信じていた知識が覆されたからだ。

「爛！　大丈夫!?」

「なんともない。大丈夫だ」

右胸を射られたものの、平然としている爛の姿を見て安堵する六花。
「……イカサマだ」
「イカサマだ!!」
「どうせ葛城さんや音無さんの手を借りたんでしょ!?」
自分達が信じて疑わなかった知識が裏切られ、その事実を受け入れられない。その結果、もたらすものが幼稚な批判。
彼らの言葉に耳を貸すつもりなどない爛は言い返すことはしなかった。
「言い返さないの?」
「言い返したところで意味はないだろうな。認めたくない現実から目を背けるために批判しているだけだ。こういうことがあるということを受け入れなければな」
あくまでも彼らに何か言おうというつもりは毛頭ない。こういうのは本人が受け入れられるかどうかの話だ。
「でも、そう簡単に受け入れられそうだとは思えないけど」
「流石に今からそうして貰えるように話してやるほど、俺はお人好しじゃない。
……それじゃあ、先に俺は戻ってるよ。周りの視線が痛いもんでね」
イカサマだのと言い出した時は騒ぎになるかと思ったが、六花と颯真が強く睨み付けていたことで、周りの生徒たちは急に黙り出した。

何食わぬ顔で爛は訓練場から去っていく。

一年生編5

授業が終わり、部屋に戻った爛。

一輝が居るはずだが、何処にも居ない。

とはいえ、彼がやることは大体の予想がついている。学園裏にあるところで鍛練でも積んでいるだろう。

「晩飯の用意をしておかないと……っと、そうだった。買い出しに行かないと」

昨日で丁度切らした調味料があった。忘れない内に買いに行かないと必要になった時に悲惨な目にあったので、買い物に行こうと準備していると――

「戻ったよ～」

「一輝？」

「やっぱり戻ってたね」

「その袋は？」

外に出ていた一輝が、両手が塞がるほどの買い物袋を持って戻ってきた。

「買い出しに行ってたんだよ。足りないものがあるから買い出しに行かないとって、爛が言ってたでしょ？　食事は爛に任せっきりだからね。買い出しぐらいは行かないと」

「そうか。なんだ、そういうことか。少し驚いたよ」
一輝は買ってきたものを冷蔵庫に積め始めた。
「一輝、話しておきたいことがある」
「話しておきたいこと？」
少なくとも、彼は知っておかなければならない。彼の実家が関わっている可能性があるのであれば尚更だ。
「実戦授業における『ありもしない規定』、ランクが低いということが分かれば、侮辱する学生騎士。お前はそれでもこの学園に居続けるのか？」
爛が言いたいことは、一輝にも分かった。他にも騎士学校は存在するし、実力主義の学園もある。一輝に向いているのはそういう騎士学校だ。
それでも、一輝はこの学園でやっていくのかと。爛はそう聞きたいのだ。
「勿論、僕だって調べられる範囲で調べたよ。でも、僕はここでいいって決めたんだ。その道は変えないよ」
「……そうか。なら、止めはしない」
ある意味で一輝は頑固者だと思った。
――コンコン。
この部屋の扉をノックする音が聞こえた。

目で合図した爛は席から立ち上がり、玄関の扉を開ける。
「六花？」
ものすごく不機嫌そうな顔をした六花が、玄関の前に立っていた。顔を出したのが爛であることを確認すると、口を閉ざしたまま爛に抱きついた。
不機嫌なときの六花がしてくる行動は、昔と変わらないようだ。
「何かあったのか？」
「……色々と言われてたよ。爛のこと」
聞きたくないことまで聞いたのだろう。微かにだが、声が震えていた。
「とにかく、中に入ってくれ」
六花を部屋の中に入れる。
「どうしたの？　穏やかには見えないね」
部屋に来たのが六花だったことには驚いていないが、彼女の顔が暗いことに違和感を感じて、首をかしげる。
「一輝……そっか、一輝は爛よりも……」
「……どうやら、俺がさっき話したことと繋がっているみたいだな」
遠回しでありながらも、あの場にいた爛は六花が何を言おうとしているのか、それがはっきりと分かった。

それは一輝も察することは容易であり……分かりきっていることだった。
「ま、俺に何かするのは構わないが、それが六花に飛び火するようであれば許さないさ」
「僕は平気だから気にしないで。六花」
「う、うん」
一輝は自分が誰よりも劣っていることを自覚しているし、その所為でどのような扱いになるかも、既に分かっている。分かっていながら、この道に進むのはそれ相応の覚悟を持っているからだ。
一輝の言葉に少しだけ安心する六花だが、彼女が浮かべる表情からは申し訳ない気持ちが伝わってくる。
「そんな顔をするな。笑顔でいてくれる方が、俺も一輝も嬉しい。
だが、何かされたらすぐに言えよ？　殺す……なんてことはしないが、模擬戦で分からせてやるから大丈夫だ」
「……爛って、六花のことになると人が変わったかのようになるよね」
「そうか？」
どうやら自覚はないそうだ。例えわざとであっても、火に油を注ぐような行為は、この二人に対してだけは止めておこうと思う一輝だった。

一年生編6

「やれやれ……落ち着いて昼飯を食うことも出来ない」

手作りの弁当の包みを片手に、呆れたようにため息をつく爛。

何故こうなっているかというと、桐原との模擬戦で勝ったのが理由だ。

現代の騎士社会ではランクが重視される。それ故に、この破軍学園ではランク重視で七星剣武祭の代表選手が選ばれる。実戦成績によって選ばれる学園もあるらしいが、それらは少数と言える。

騎士ランクが高いことは実力がある……という偏見がついて回っているようだ。強ちそれが間違いだとも言えない。高ランクを保有しているものは実力のあるものが多い。

だが、それは彼等が裏で才能以上に努力という対価を支払っているということを知らないがために、そのような偏見がついて回り、その結果、桐原、そして彼の取り巻きたちのような人間が生まれる。

本当の実力を知っている者はそれらに毒されることはない。それは爛がよく知っている。

そのような人間ばかりいる破軍学園には、心底うんざりしており……それと同時に、入学するべきではなかったと後悔する気持ちもなくはない。

「それで退学すれば、俺もそこまでの奴だった。という話になるだけだな」

やっと落ち着けそうな場所を見つけた爛は、ようやく昼食にありつくことが出来た。

昼食を食べ終え、自室へと引き返した爛。

「……あ、爛。おかえり」

「一輝、何があったんだ」

「何って？」

「とぼけるな。俺の目を誤魔化せると思ってるのか。お前、霊装で傷つけられただろ。早く見せろ、手当てするから」

部屋にいた一輝の服がところどころ破れている。

桐原は爛をからかうだけには飽き足らず、一輝にまで手を出してきた。最初は陰口だったり、からかうだけだったのだが、一輝が一切相手をしないからか行為はエスカレート。周りにも聞こえるレベルで悪口を言ったり、果てには霊装展開禁止場所で霊装を展開し、一輝に私闘を受けるように迫り、何度も矢を放ったらしい。

一輝は学園からどう思われているかは察しているらしく、戦闘行為と思われてしまうことは一切出来ない。あの手この手で退学させようとする学園側の思惑は駄々漏れ。

最悪の場合、回避するだけでも戦闘行為と取られてしまう可能性もあった。
一輝の鋼の精神で桐原に対しては何もせず、思わせ振りに走ってきた職員によって止められた。一輝は一切なにもしていないことは監視カメラに記録されているので、一輝が戦闘行為を取っていないという事実があるため、学園も退学させるということはなかった。だが、桐原は名前だけの厳重注意が処罰として下されただけだった。
「やれやれ、学園側もお前を退学させようと必死だな。間違いなく職員も手を貸しているな」
「あの場に職員がいたのは既に確認してたよ。僕が何か動き出したら、取り抑えるつもりだったみたい」
「話を聞けば聞くほど、理事長が腐ってるのが分かるな」
傷の手当てをする爛はため息をつくしかなかった。
「……よし、これでいいな。終わったぞ」
「ありがとう……ねえ、爛」
「なんだ？」
「何も感じないの？」
「お前が言いたいことは理解できる。退学をして、別の学園に行く手だってあるのも知っている」

「なら……」
「俺がここにいるのはお前に同情して……というわけじゃない。俺には約束がある」
「約束？」
　爛の言葉に一輝は首を傾げた。
「ああ、約束だ。三年前、一歳下のある女の子を助けてな。その子も伐刀者だったんだ。また会いたいと言ってきてな。日本に来れば、また会える……そう言ったんだ。もし外国の人間が日本に来るのならまず何処に行きたがる？」
「首都の東京……」
「ああ。そこの近くにあるのは破軍学園。七星剣武祭でも多くの功績を残している。あの子の目につく可能性があるとしたら、ここだろうと思ってな。まあ、家の位置の関係上、ここが一番都合がいいってのもある」
　ま、そんな理由さ。といいながら救急箱を棚に戻す爛。
　会えるかも分からない少女のために待とうとする爛は、何処と無く悲しそうで、嬉しそうでもあった。
「それより、お前もこれから気を付けろよ。もっとタチの悪いものが出てこないとは限らないんだからな」
「……うん、分かってる」

◇◇◇

「……で、今度は俺が標的になったわけだな。ハア……ったく、あいつらもあいつらで暇人だな。つるんでる奴等とカラオケにでも行ってこいよ」

「あはは……随分辛辣だね」

「あんな奴等に同情する方が身が持たんわ。全く、こういうのを別の方面で使ってくれないかね」

桐原たちは爛を次の標的にし始めた。

どうやら今日は爛だけをターゲットにしているらしく、彼の犠牲の上に一輝の平穏が訪れていた。

自分に迷惑がかかるのは構わないらしいが、それが唐突に降りかかってくるのは避けたかったようだ。何とか振り切ってベンチに座っている爛はある意味で疲れきっていた。

「大丈夫か、爛」

「悪いな、颯真。お前にも迷惑をかける」

「構わないさ。突っ掛かってきたら模擬戦で黙らせてやるのが一番だ」

奴等から爛の行方を眩ませるために、六花と颯真も協力した。

訓練場での一件がきっかけで、颯真に挑んでくる生徒がいるのだ。というのも、颯真

は爛が去った後にわざとらしく怒りを買うようなことを言ったのだ。才能が全てだと思い込んでいる連中の逆鱗に触れ、全員が颯真を黙らせようとしたものの、試合開始数秒で決着をつける颯真に心が折られたようだ。それでも挑んでくる屈強（？）な精神の持ち主がいるようだが。

それらも手で虫を払うようにあしらったことで、颯真は彼等の標的になることはなかった。

六花のことだが、桐原に目をつけられているらしい。当の本人は「爛にしか興味はない」と言い切って相手にしていない。流石にランクがＡの六花に喧嘩を売ると八つ裂きになる自覚があるのか、彼女に突っ掛かってくることは少なくなったようだ。

「早撃ちの練習として最適だからな」

「それ、言い方次第だと誤解されかねないよ？」

「事実だぞ？　最近はタイムが縮んできてる。能力無しでも五秒切れるようになってきたんだ。それでも、爛には勝てないけどな」

「最初の頃はキツかったんだがな……お前のお陰で俺の反射神経は鍛えられてるよ」

誤解されようが別に知ったことじゃないと、平然としている颯真に、一輝は爛に視線を向けるが、彼の顔が苦笑のままで変わることがないことから、どうしようもできないと察したようだ。

「そうだ、爛。六花が溜め息をつくようになったから相手してやってくれ」
「分かった。部屋で待ってると伝えておいてくれ」
「了解」
六花も人間だ。あんな悪質な奴に突っ掛かってこられては、ストレスは絶対に溜まる。適度にストレスを吐き出させないと、彼女が精神的に参ってしまう可能性もある。
棒読み気味に返す颯真はベンチから立ち上がり、手を振りながら寮の方へと歩いていった。
「さて、俺たちも寮に戻るか」
「うん」
ここに意味もなくいても面倒に絡まれるだけなので、爛と一輝は早々に自室へと引き返した。